

つなぐ

令和5年7月3日（月）発行

相談支援部 No.4（通巻 No.69）

都立青山特別支援学校長 井上 一仁
相談支援部主任 中村 尚子
本号作成 中村 尚子
飯干 真

副籍交流 出前授業の御紹介

副籍交流は、都立特別支援学校の児童・生徒が、居住地域の小・中学校に副次的な籍を置き、交流を行う事業です。特別支援学校の子供たちと小・中学校の子供たちは、近くで暮らしているけれど、知り合ったり、日頃から触れ合ったりすることはしにくい環境にあります。副籍交流を通して、同じ地域に暮らす子供たち同士が、違いを認め合い、親しみを感じられるよう、本校から講師が出張し、小・中学校の子供たち向けに出前授業を実施しています。小学校低学年では、対象児童がどんなことが好きか、どんなことをがんばっているか、特別支援学校はどんなところか等の内容が中心です。学年が上がるにつれて、徐々に発達の特徴や、障害があるということを加えた内容に発展します。本号では、小学校での出前授業の一部を御紹介します。

1 『ふくせき』ってなあに？

ときどき、みんなに
あいにいきま！
それが「ふくせき」

青山とくべつしえん学校

まじり かよう
学校は こちら

〇〇小
〇〇小の
ちかどぼ

2 ともだちのことをしろう

△△さんの すきなことは・・・

顔写真が
入ります。

3 とくべつしえん学校って どんな学校？

どうして
とくべつしえん
学校に
行くのかな？

こんな ともだちの ための 学校 です。

- ・ゆっくり べんきょう したい。
- ・くりかえし れんしゅう したい。
- ・じぶん にあう べんきょう を したい。
- ・すくない 人ずう で べんきょう したい。

とくべつしえん学校 には、 たくさん の くふう が あるよ

目で見てわかるように

おわりが
わかるように

することが
わかるように

きもちが つたえられるように

だい1もん 4 学校クイズ

〇〇小の2年生は、2 クラス
ぜんぶで 64 人ですね。

では、青山とくべつしえん学校の2年生は
??

4 クラス 15 人

顔写真が
入ります。

わたしは、
2年△組
だよ！

だい3もん 4 学校クイズ

〇〇小のみなさんは、歩いて学校にか
よいますね。

では、青山とくべつしえん学校の ともだ
ちは、どうやって 学校にかようでしょう？

スクールバス

8だい
あるよ！

顔写真が
入ります。

わたしは、
□コースに
の
っているよ！

5 とくべつしえん学校での △△さん

はさみで きって、
のりで はって、
きのこをつかったよ。

活動の様子の写真が
入ります。

6 △△さんと なかよくなるには・・・

おはなしは、
れんしゅう中
です。

うまく こたえられない
こと があるけれど、
おともだちに
はなしかけられる のは、
大すき です！

顔写真が
入ります。

6 △△さんと なかよくなるには・・・

かいだんは、
ちよっと にが手 です。

いっしょにあるく ときは、
ゆっくり
おねがい
します。

顔写真が
入ります。

学校・学年によりますが、授業の最後には、地域指定校の皆さんから本校の児童・生徒へのメッセージ等を書いてもらうこともあります。「〇〇さんと会うのが楽しみになったよ」「〇〇さんと好きな食べ物と同じだよ」「△△小には楽しい遊具があるから一緒にやろうね」のように、温かいメッセージを書いてくれるお子さんが多く、大切な交流の一歩になっています。

コラム 子どもたちの「安全基地」になろう

「子どもが主体的な行動を起こすには安全基地となる大人が必要である」と心理学者メアリー・エインスワースが提唱しています。「安全基地」とは、場所のことではなく、「人の役割」のことです。子どもたちが、「これは何かな？」という興味や関心、「やってみよう」という挑戦する姿を送り出し見守ることや、一緒に喜んだり、慰めたりする行為を通して、何かあったときに戻ってこられる安心感を伝える役割のことを指します。もともとは親子の関係で育まれるものとされてきましたが、学校や地域など、子どもたちに関わる様々な大人が、子どもにとって安心でき、信頼できる「安全基地」となる必要があると言われていました。

感覚的な特性やその他様々な状況から不安感が強く、防衛的な反応（拒否、攻撃、取り込み、身構え）が強く出てしまう子どもがいます。例えば「手が出てしまう」子がいるとします。

私たちはつい目の前の出来事のみ反応します。「なにやってるの！」「いけません！」ととっさに言ってしまうかもしれません。そして、なかなか無くならないその行動を何とかしようと焦る気持ちが高まり、イライラしてしまうことがあるかもしれません。そういう感情の高まりは、子どもの不安感をさらに大きくします。できることなら、穏やかに落ち着いて様々な出来事に対応したいものです。だからこそ、その子が「なぜ手が出たのか」「どういう気持ちだったのか」ということを考えていくことが大切だと思います。子どもの行動に対する捉え方が変わってくるからです。

その子はもしかしたら、「人が突然近づいてきて怖かった」とか「お友達だと思って手を伸ばした」のかもしれませんが、「大人の関わり方が、無理強いに感じ拒否を表した」のかもしれませんが、目の前の出来事に捉われるのではなく、その子のもつ背景に目を向けることや、気持ちに寄り添い、代弁してあげること、「こうすればいいんだよ」と適切な対応の仕方を伝えることの方が大切なのではないかと思います。

私たち大人は、ついつい「ちゃんとさせたい」と考えてしまいます。「ちゃんと」には「きちんとしている。間違っていない。規準に沿っている」という意味合いがあります。社会に出たら、苦労させたくないという思いが強ければ強いほど、「ちゃんとさせたい」と考えてしまうのかもしれませんが、でも、「ちゃんと」が必要以上に溢れたとき、「安心で楽しく過ごす」ということが削げ落ちていきます。「安心感」がある場所の方が、人は力を発揮できます。力を発揮できるだけでなく、困ったときに困ったことを表す「援助要求」もしやすくなります。子どもたちにとって安心できる場所というのはとても大切なのです。安心できる場所であるからこそ、意欲的に継続的に様々なことに取り組んでいけるのだと思います。

以前訪問支援で出会った小学校の先生が「ほめ言葉シャワー」という実践をしていました。クラスにたくさんの温かい言葉を増やしましょうという取り組みでした。暖かい言葉は、安心感をもって生活するためのとても大切な要素の一つだと思います。

「ほめる」ことや「ありがとう」と伝えることはとても大切です。これらの言葉には、言葉のもつ意味や響きの他にも大きな力があります。日常的に伝えられている人の脳には「ドーパミン」が分泌されます。このことが、意欲や幸福感を高め、さらには情緒の育ちなどの心理的機能にも影響を及ぼします。そして、ほめた側の脳にもドーパミンが分泌されると言われています。つまり、ほめた人も、ほめられた人も、意欲や幸福感が高まるすごい言葉なのです。

でも、ほめるところを探すことが得意でない方もいますよね。結果や現象をみて「できていない」と捉えてしまうと、ついつい「ちゃんと」があふれてしまいます。「○○できたね」という結果だけでなく、右の表のように様々な視点をもつことで、「ほめ言葉」や「ありがとう」を増やしていけるのではないかと思います。

子どもだけでなく、大人も認められる存在でいることは、とても大切です。ちょっとだけハードルを下げて、自分のこともほめてください。そして周りの人たちとも、認め合いましょ。子どもに関わる人たちも認められ、安心して過ごせる環境でいること。それが、子どもたちの「安全基地」となりうる存在なるための1歩かもしれません。

～6つの「ほめポイント」～

- 1 「よくできたね」できたことを認める「**結果ほめ**」
- 2 その子の前と今を比較してその成長を認める「**成長ほめ**」
- 3 「いいよ。走ってるね」等 今行っていることを認める「**行動ほめ**」
- 4 過程を認める「**過程ほめ**」
- 5 「やろうとしていたね」意欲を認める「**意欲ほめ**」
- 6 「今日も学校に来てくれてありがとう」というその子の存在を認める「**存在ほめ**」